

PAT-NO: JP406135271A

DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 06135271 A

TITLE: REAR SEAT INCORPORATING BABY
SEAT, FOR AUTOMOBILE

PUBN-DATE: May 17, 1994

INVENTOR-INFORMATION:

NAME

MATSUO, TAKASHI
SUZUKI, MASAHIRO
IJIMA, TAKAYOSHI
TAKANE, HITOSHI

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME

COUNTRY

SUZUKI MOTOR CORP

N/A

APPL-NO: JP04290108

APPL-DATE: October 28, 1992

INT-CL (IPC): B60N002/26, B60N002/30 , B60N002/46
, B60R022/10

US-CL-CURRENT: 297/238

ABSTRACT:

PURPOSE: To use a baby cushion serving as a child seat for an arm rest.

CONSTITUTION: A seat back 8 of a rear seat for an automobile incorporates a baby cushion 4 which is rotated about its lower end so as to be inclined forward, and which serves as a part the seat back 8 when it is stored. The baby cushion 4 is foldable at an intermediate part thereof so as to serve as an arm rest 46.

COPYRIGHT: (C)1994,JPO&Japio

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-135271

(43)公開日 平成6年(1994)5月17日

(51)IntCl⁵

識別記号

庁内整理番号

FI

技術表示箇所

B60N 2/26

2/30

2/46

B60R 22/10

9253-3D

審査請求 未請求 請求項の数1(全7頁)

(21)出願番号 特願平4-290108

(22)出願日 平成4年(1992)10月28日

(71)出願人 000002082

スズキ株式会社

静岡県浜松市高塚町300番地

(72)発明者 松尾 隆

静岡県浜松市高塚町300番地 スズキ株式
会社内

(72)発明者 鈴木 昌宏

静岡県浜松市高塚町300番地 スズキ株式
会社内

(72)発明者 井嶋 隆芳

静岡県浜松市高塚町300番地 スズキ株式
会社内

(74)代理人 弁理士 奥山 尚男 (外2名)

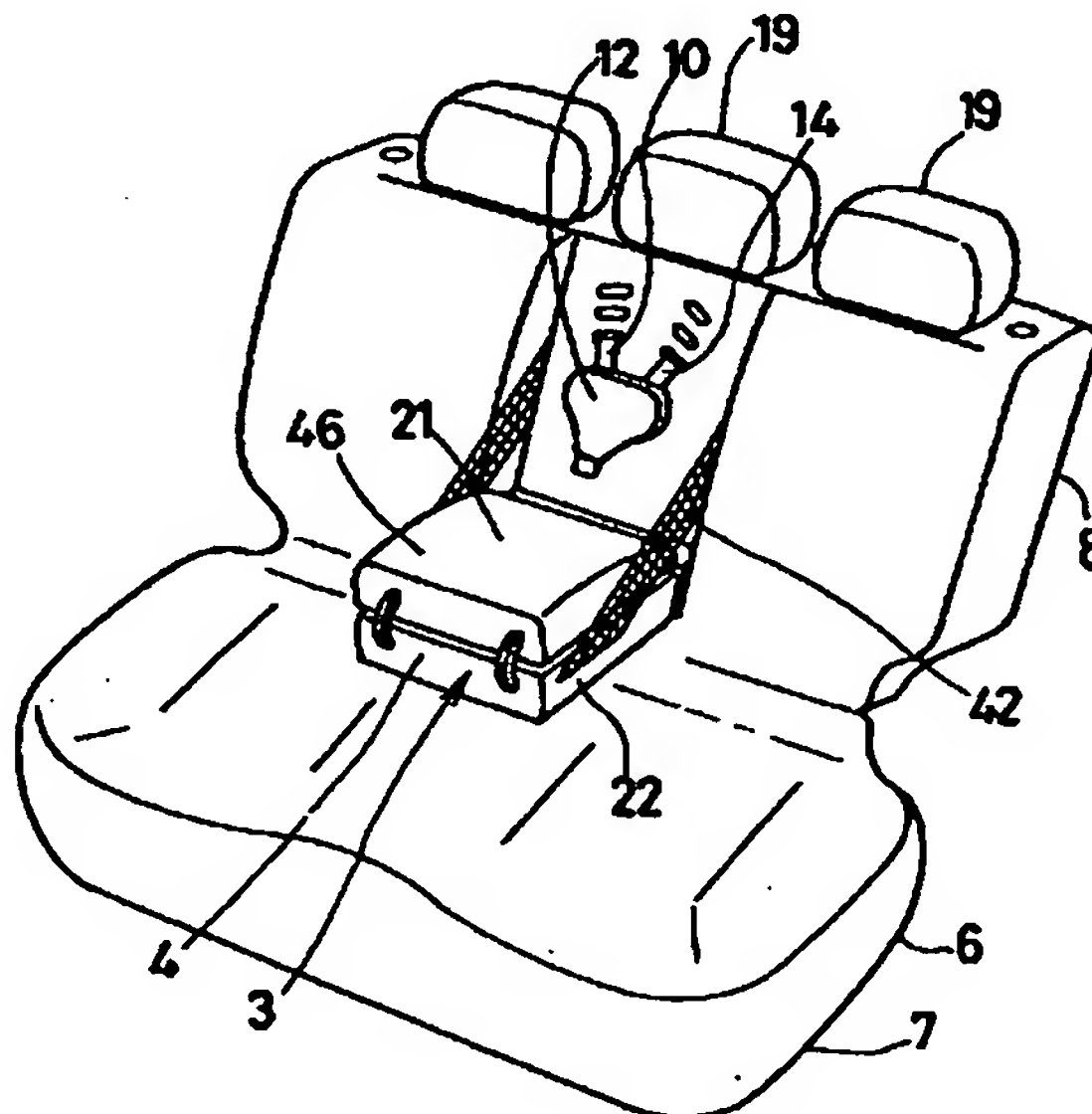
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 子供用シート付自動車用リヤシート

(57)【要約】

【目的】 チャイルドシートとしての幼児用クッションをアームレストに兼用できる子供用シート付自動車用リヤシートである。

【構成】 自動車用リヤシートのシートバック8に、下端部を中心に回動して前方に倒れる幼児用クッション4を内蔵すると共に、幼児用クッション4の格納状態では、幼児用クッション4がシートバック8の背もたれを構成するようにした子供用シート付自動車用リヤシートにおいて、上記幼児用クッション4がアームレスト46を兼ねるように該幼児用クッション4を途中から折り畳み可能に構成したことにある。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 自動車用リヤシートのシートバックに、下端部を中心に回動して前方に倒れる幼児用クッションを内蔵すると共に、幼児用クッションの格納状態では、幼児用クッションがシートバックの背もたれを構成するようにした子供用シート付自動車用リヤシートにおいて、上記幼児用クッションがアームレストを兼ねるように該幼児用クッションを途中から折り畳み可能に構成したことを特徴とする子供用シート付自動車用リヤシート。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、アームレストを兼ねる幼児用クッションを内蔵した子供用シート付自動車用リヤシートに関する。

【0002】

【従来の技術】従来、自動車に幼児を乗せる際、大人用のシートベルトの着用が不可能であるため、いわゆるチャイルドシートが使用されている。チャイルドシートは、自動車の助手席あるいは後部座席に据え付けて使用するため、大人が乗る際には邪魔になり、その都度、取り付けたり、取り外したりしなければならなかった。この為、チャイルドシートの必要性が認められているにもかかわらず、着用率は以外と低いものであった。

【0003】そこで、助手席シート等に、予めチャイルドシートを組み込んだ型式のものが、新たに開発されている。図13に示したものは、助手席シート100に、チャイルドシート101を一体に組み込んだもので、シートクッション102とシートバック103から成る助手席シート100のシートバック103の一部を前方に倒れるようにして、これを幼児が坐るクッション104に利用したものである。このチャイルドシート101は、前倒しにしたクッション104の上に幼児を座らせ、このクッション104とシートバック103の間に内蔵した保護ベルト105を幼児に装着し、この保護ベルト105に設けられた胸当て106の固定金具107をクッション104に装着したバックル108に装着して使用される。また、大人が乗る際には、クッション104を起こして通常のシートバック103として利用することができる。

【0004】しかしながら、たとえば、母親が運転している場合、助手席シート100に座っている幼児が動くため、この様子を、運転している母親が確認する場合、視線を前方から大きく反らせて確認する必要がある。また、幼児が手を伸ばすことで、ドアロックのノブあるいはインサイドハンドルに手が届き、走行中、保護者の注意が必要である。更に、幼児が大きくなると、幼児用のチャイルドシート101では小さくなり、使用期間が限られている。

【0005】一方、リヤシートにチャイルドシートを内

蔵したものも知られている。図14に示したものは、リヤシート109のシートバック110の前面中央部の一部を破線のように前方に倒れるようにして、これを幼児が坐るクッション111に利用したものである。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記の従来技術によると、幼児が乗らないときにクッション111をアームレストとして利用するにはクッション111が低すぎるので不具合となる。

10 【0007】本発明は上記課題を解決し、チャイルドシートとしての幼児用クッションをアームレストに兼用できる子供用シート付自動車用リヤシートを提供することを目的とする。

【0008】

【課題を解決するための手段】本発明は、上記課題を解決するため、自動車用リヤシートのシートバックに、下端部を中心に回動して前方に倒れる幼児用クッションを内蔵すると共に、幼児用クッションの格納状態では、幼児用クッションがシートバックの背もたれを構成するようにした子供用シート付自動車用リヤシートにおいて、上記幼児用クッションがアームレストを兼ねるように該幼児用クッションを途中から折り畳み可能に構成したことにある。

【0009】

【作用】幼児を乗せて運転する際には、リヤシートのシートバックに設けられている幼児用クッションを倒して、幼児を座らせ、保護ベルトを幼児に装着する。こうして、幼児をリヤシートに坐らせることができるので、運転席から、インサイドミラーを通して容易にリヤシートの幼児を確認することができる。また、大人が乗る場合は、幼児用クッションをシートバックに収納して、通常のシートとして使用することができる。さらに、幼児が乗らない場合には、幼児用クッションを折り畳むことにより、アームレストとして利用することができる。

【0010】

【実施例】以下本発明の一実施例を図面を参照しながら詳細に説明する。

40 【0011】図1ないし図5において、1は自動車の車体で、この車体1の前部にはフロントシート2が設けられ、車体1の後部には、子供用シート3として、幼児用クッション4および学童用クッション5、5を内蔵したリヤシート6が設けられている。

【0012】このリヤシート6はシートクッション7とシートバック8で構成され、このシートバック8の前面中央部に、主に乳児から4才未満を対象にした幼児用クッション4が前倒し可能に内蔵され、この幼児用クッション4を挟んで、その両側に4才以上の児童を対象にした学童用クッション5、5が前倒し可能に内蔵されている。

50 【0013】上記リヤシート6のシートバック8には、

前面に凹部9が形成されており、この凹部9内に上記幼児用クッション4および学童用クッション5、5が並べて収納され、この幼児用クッション4および学童用クッション5、5の裏面が格納時に背もたれになるように構成されている。

【0014】幼児用クッション4の横幅W1は学童用クッション5、5の横幅W2より狭く、 $W1 < W2$ に形成され、かつ幼児用クッション4の長さL1は学童用クッション5、5の長さL2より短く、 $L1 < L2$ に形成されている。幼児用クッション4は、シートバック8と幼児用クッション4との間に、幼児用の保護ベルト10が内装されており、幼児用クッション4の使用時に、幼児に装着させるものである。

【0015】保護ベルト10は、幼児用クッション4に装着されたバックル11と、シートバック8に装着された腹部保護パッド12で構成されており、腹部保護パッド12はシートバック8の裏面側に配置されたリトラクタ（図示せず）から左右一対の引き出し穴13を通して引き出された2本のベルト14に装着されている。

【0016】一方、学童用クッション5、5は、それぞれ両側面にベルトガイド15が装着されており、使用時には、図5に示すように、3点式のシートベルト16のベルト17をベルトガイド15に掛けてからバックル18に留めることにより、学童の身体に合うようにしている。2点式のシートベルトの場合も同様である。上記シートバック8には幼児用クッション4および学童用クッション5、5に合わせてヘッドレスト19がそれぞれ設けられている。

【0017】次に幼児用クッション4および学童用クッション5、5の構造について図6ないし図10に従って説明する。幼児用クッション4は、図6ないし図8に示すように、補強プレート20、20を内蔵した二つのクッション本体21、22で構成されており、これら補強プレート20、20に設けられた左右各一対のステー23、24を互いに連結して構成されている。ステー23、24は相互間にそれぞれブッシュ25を介在して、ネジ26、ワッシャー27、鈎付きナット28を介して締結されている。幼児用クッション4は、基端側のクッション本体22に設けられたステー29をシートバック8内の補強フレーム30に装着されたアームレストブラケット31に、図8に示すように、ネジ32、ワッシャー33、ブッシュ34、鈎付きナット35を介して回動可能に締結されている。

【0018】幼児用クッション4は、学童用クッション5、5よりも座る位置が高くなるように回動位置を高く設定しており、この幼児用クッション4の基端側の空間部にシートバック8の下部36が配置されるように構成されている。このシートバック8の下部36は幼児用クッション4を前倒しにした際に、同一高さで奥行き方向に連続するように構成されている。

【0019】幼児用クッション4は、先端側のクッション本体21の裏面が格納時に背もたれの曲面になるように形成し、かつクッション本体21、22相互間で折曲げ可能に形成され、幼児が脚を斜め下方向に伸ばせるようにしてある。

【0020】次に、学童用クッション5、5は図9および図10に示すように、クッション本体37内に補強フレーム38と、スプリング39を内装し、上記補強フレーム38にステー40が設けられている。この学童用クッション5、5はシートバック8に設けられたアームレストブラケット31と、ヒンジアーム41にステー40を介して支持されている。このステー40はアームレストブラケット31およびヒンジアーム41に、図8と同様に、ネジ32、ワッシャー33、ブッシュ34、鈎付きナット35を介して締結されている。

【0021】42は幼児用クッション4とシートバック8との間に設けられた保護用ネットであり、これは幼児用クッション4を水平に保つものである。幼児用クッション4は、クッション本体21、22を互いに重なるように折り畳むことにより、図11に示すように、アームレスト46として使用することができる。43はサイドドア44の内面に設けられたウィンドレギュレータであり、45はインサイドハンドルである。

【0022】上記構成による子供用シート付自動車用リヤシートの使用方法を説明する。大人がリヤシート6に坐る場合は、幼児用クッション4および学童用クッション5、5をシートバック8に格納して使用する（図1参照）。また、幼児用クッションを折り畳んでアームレスト46として利用することもできる（図11参照）。

【0023】次に、幼児を乗せて走行する場合には、幼児用クッション4を前方に倒して、幼児用クッション4に幼児を坐らせ、幼児の身体に保護ベルト10を装着する（図4参照）。こうして、リヤシート6に幼児を坐らせて運転をすることができる。保護者からインサイドミラーを通して幼児を見ることができるので、視線を大きく反らすことなく幼児の様子を観察することができる。幼児からウィンドレギュレータ43およびインサイドハンドル45が遠くなることから、幼児によるこれらのものに対する操作を防止することができる。

【0024】また、幼児よりも少し成長した学童を乗せて走行する場合には、学童用クッション5、5を前方に倒して、これに学童を坐らせる。学童には、車体に装備されているシートベルト16を装着する。シートベルト16のベルト17は学童用クッション5、5に装着されているベルトガイド15に引掛けてからバックル18に留める（図5参照）。こうして、学童はシートクッション7に坐るよりも視界が開け、かつシートベルト16のベルト17をベルトガイド15に掛けて装着するので、身体の適正位置にシートベルト16を装着することができる。

【0025】次に幼児と一人または二人の学童を乗せて走行する場合には、幼児用クッション4と学童用クッション5、5の両方を前方に倒して使用する(図2参照)。こうして、幼児と一人または二人の学童をリヤシート6に乗せて走行することができる。

【0026】また、幼児と共に大人がリヤシート6に坐る場合には、幼児用クッション4を倒して幼児を坐らせ、大人はその横に坐ることができる(図4参照)。さらに、幼児と学童と共に大人が坐る場合には幼児用クッション4と学童用クッション5を一つ倒して、三人で座

【0027】なお、図12に示すように、学童用クッション5を一つにして、幼児用クッション4の位置を片側にずらして、学童用クッション5の幅W3を小さくすることにより、他方の席を広くできるので、大人が座る際の座面を大きくとることができる。

【0028】

【発明の効果】以上述べたように、本発明による子供用シート付自動車用リヤシートによれば、自動車用リヤシートのシートバックに、下端部を中心に回転して前方に倒れる幼児用クッションを内蔵すると共に、幼児用クッションの格納状態では、幼児用クッションがシートバックの背もたれを構成するようにした子供用シート付自動車用リヤシートにおいて、上記幼児用クッションがアームレストを兼ねるように該幼児用クッションを途中から折り畳み可能に構成したので、幼児が利用しないときは、幼児用クッションを折り畳んで、アームレストとして利用することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の子供用シート付自動車用リヤシートを適用した一実施例を示す自動車の室内斜視図である。

【図2】本発明の子供用シート付自動車用リヤシートの使用状態を示す斜視図である。

【図3】幼児用クッションおよび学童用クッションを収納した状態の正面図である。

【図4】幼児用クッションの使用状態を示す斜視図である。

【図5】一つの学童用クッション使用状態を示す斜視図である。

【図6】幼児用クッションの基端部の取付構造を示す斜視図である。

【図7】幼児用クッションの中間部の取付構造を示す斜視図である。

【図8】幼児用クッションの基端部の取付構造を示す断面図である。

【図9】学童用クッションの取付構造を示す斜視図である。

【図10】学童用クッションの平面図である。

【図11】幼児用クッションをアームレストとして利用した実施例を示す斜視図である。

【図12】本発明の子供用シート付自動車用リヤシートの他の実施例を示す斜視図である。

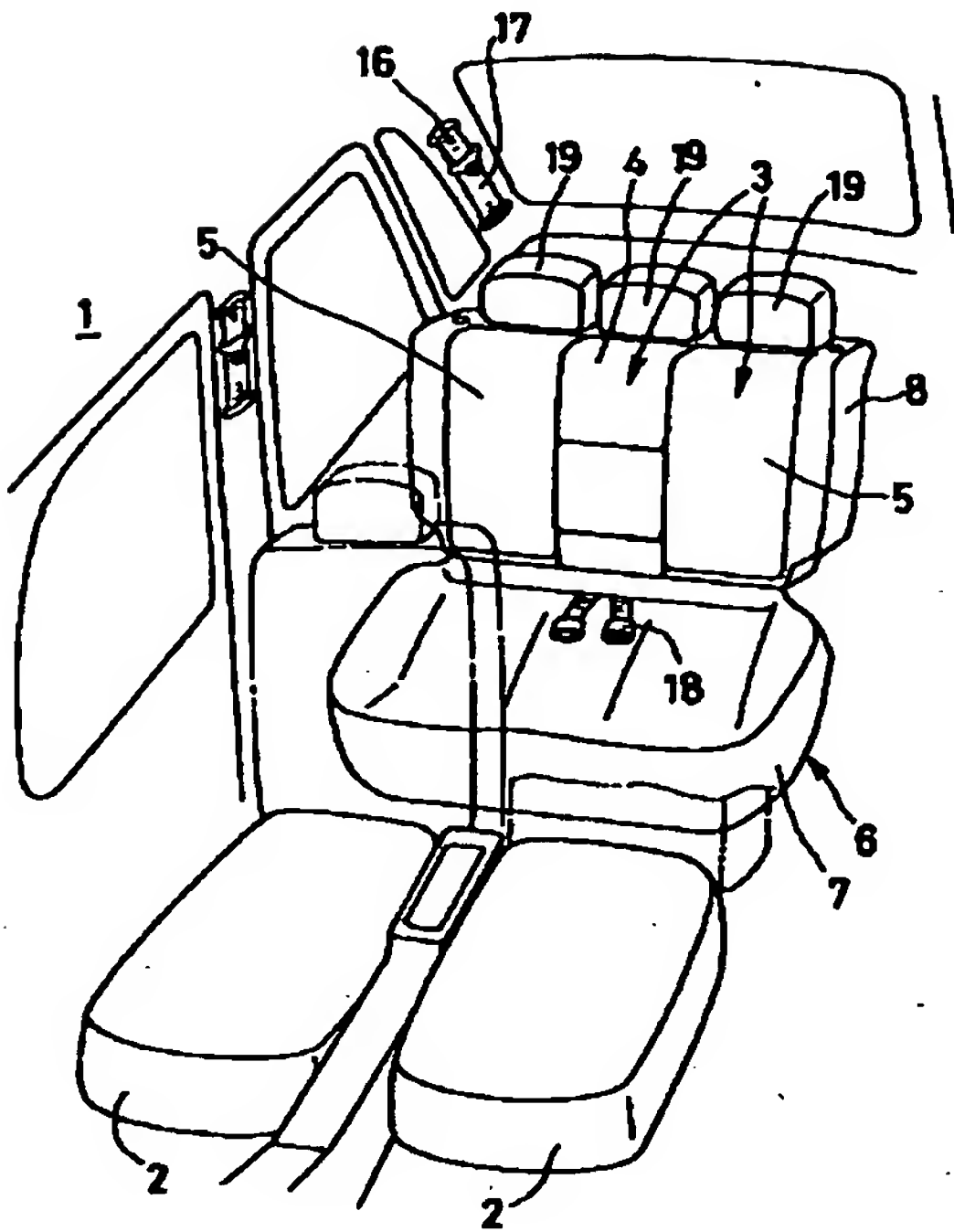
【図13】従来の子供用シート付自動車シートを示す斜視図である。

【図14】従来の子供用シート付自動車用リヤシートを示す斜視図である。

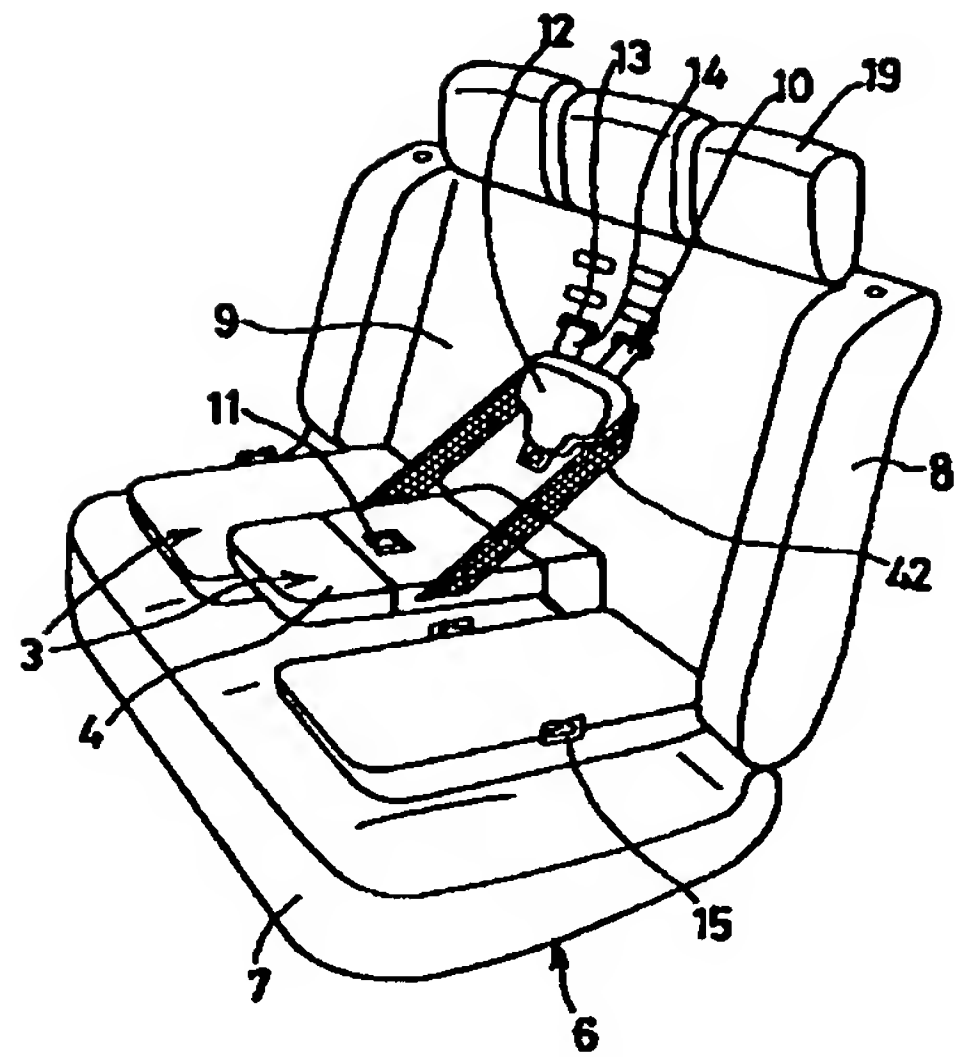
【符号の説明】

- 1 車体
- 2 フロントシート
- 3 子供用シート
- 4 幼児用クッション
- 5 学童用クッション
- 7 シートクッション
- 8 シートバック
- 9 凹部
- 10 保護ベルト
- 11 バックル
- 12 腹部保護パッド
- 13 ベルト通し穴
- 14 ベルト
- 15 ベルトガイド
- 16 シートベルト
- 17 ベルト
- 19 ヘッドレスト
- 21 クッション本体
- 22 クッション本体
- 46 アームレスト

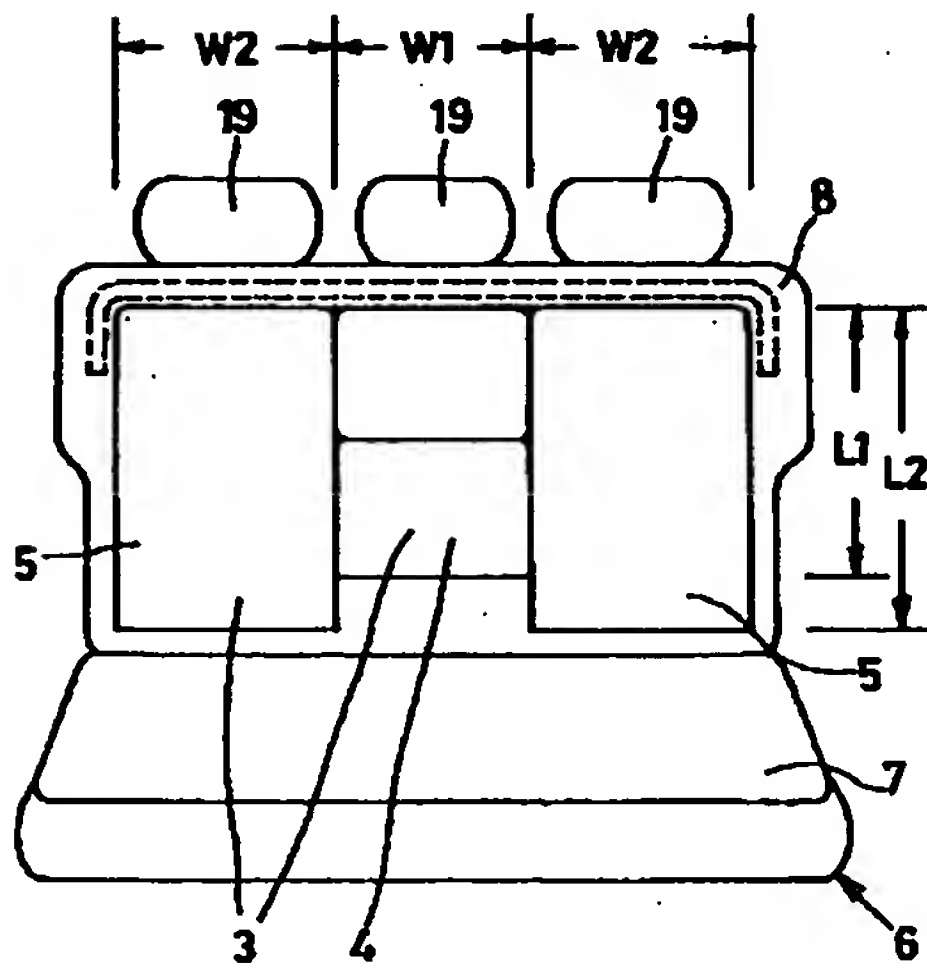
【図1】



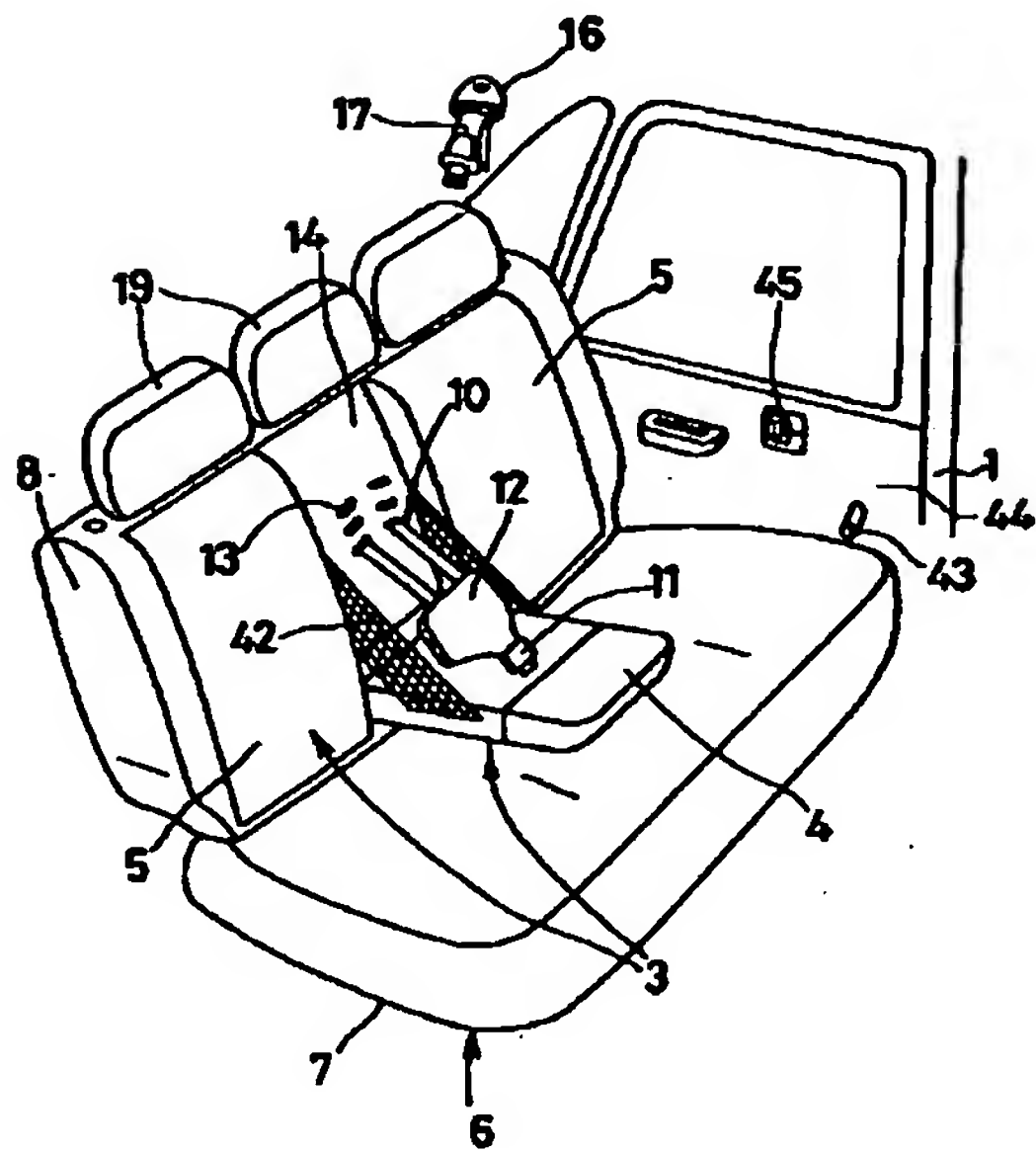
【図2】



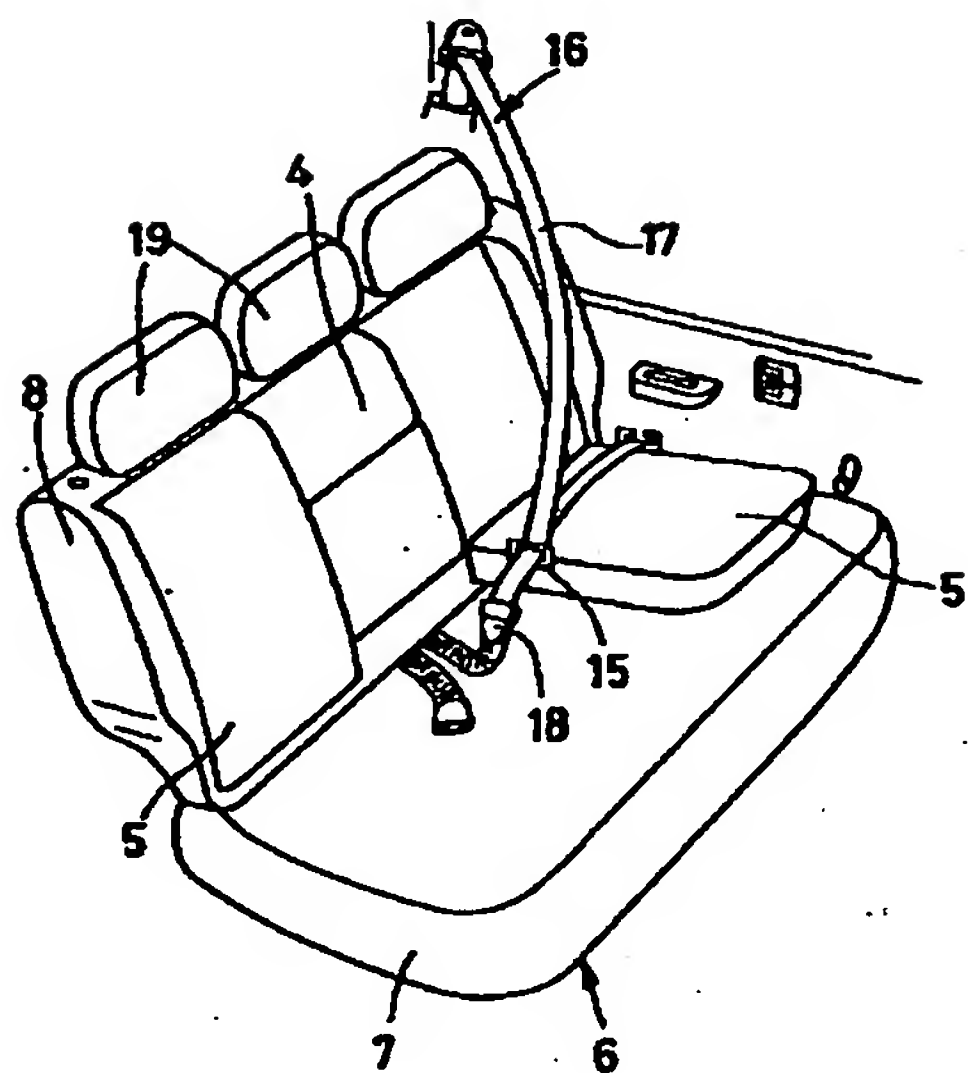
【図3】



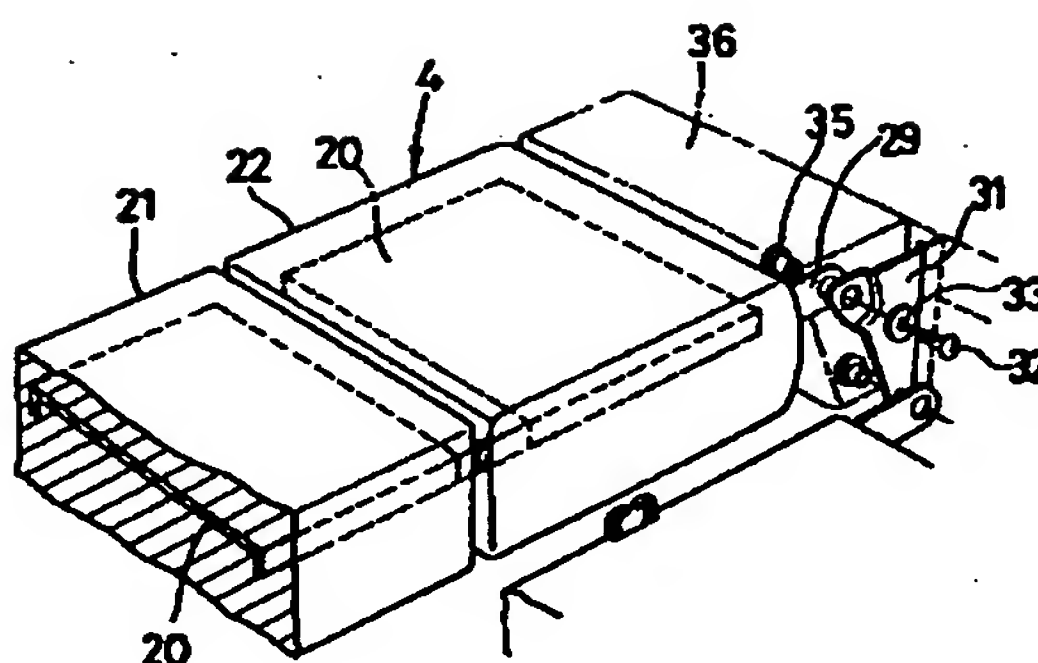
【図4】



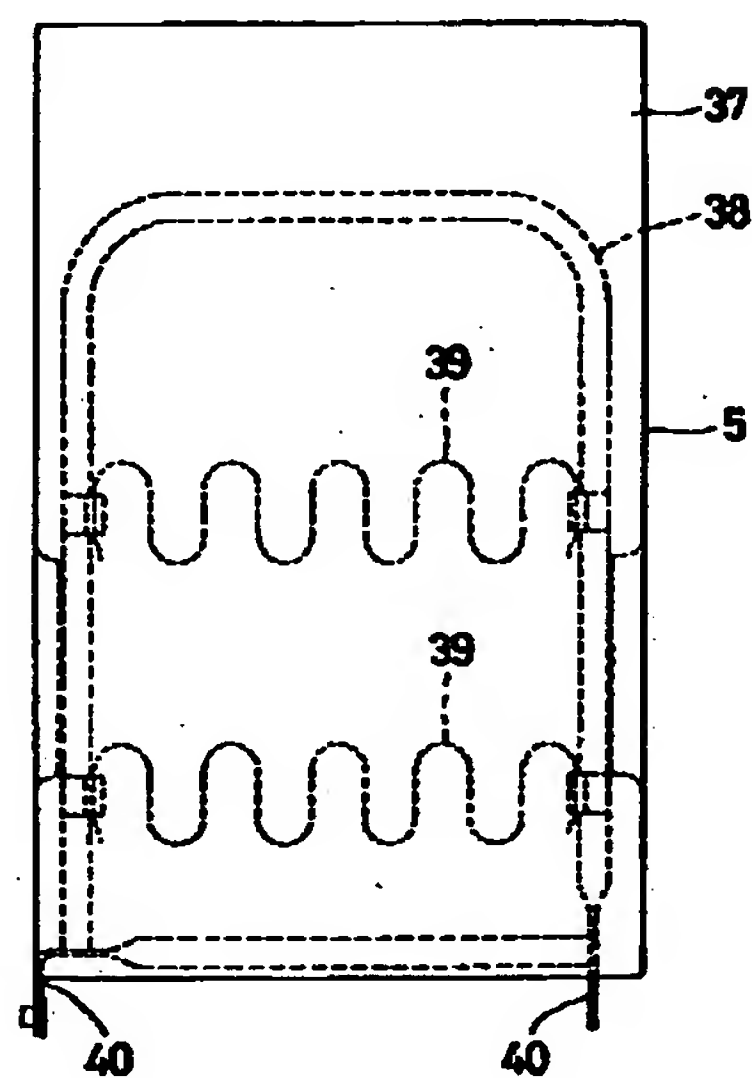
【図5】



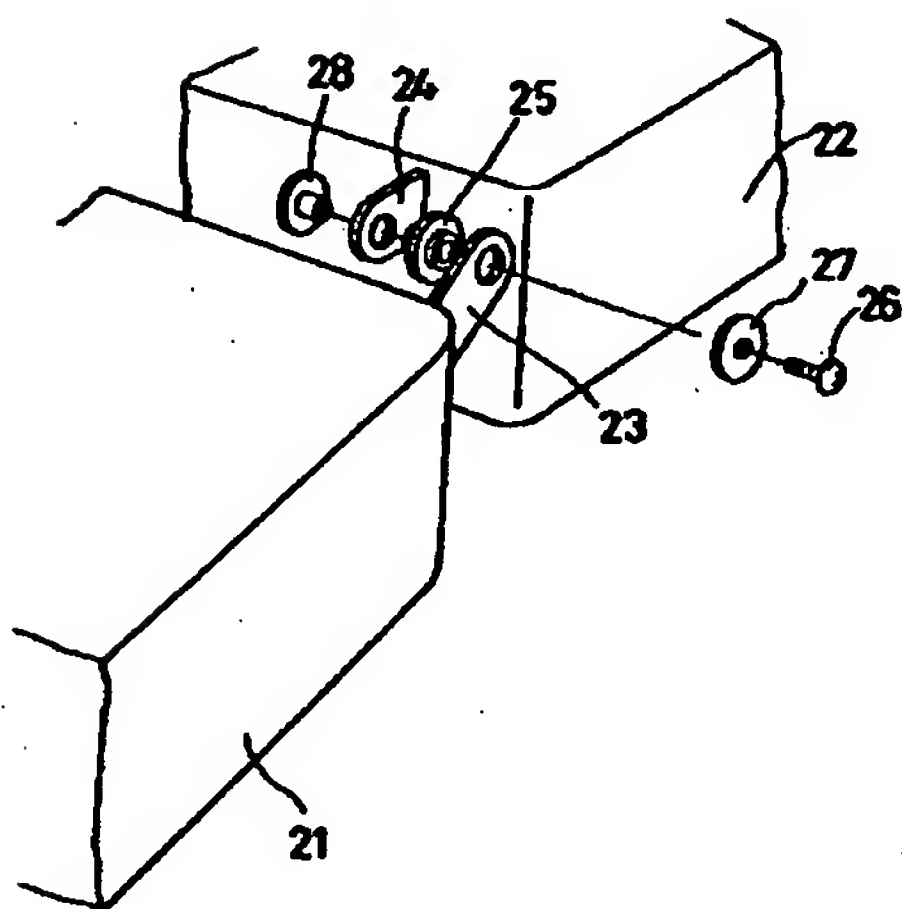
【図6】



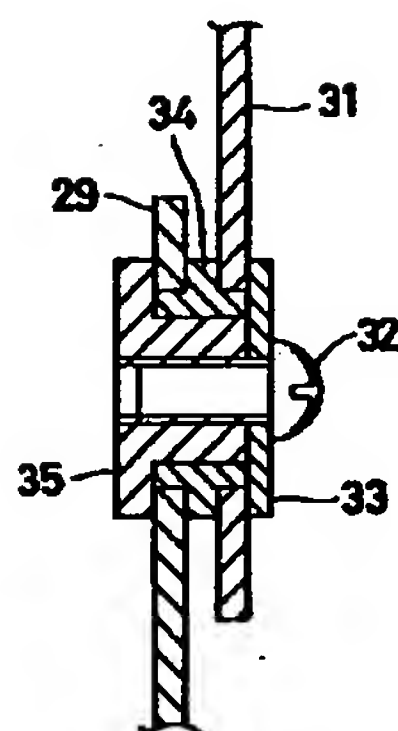
【図10】



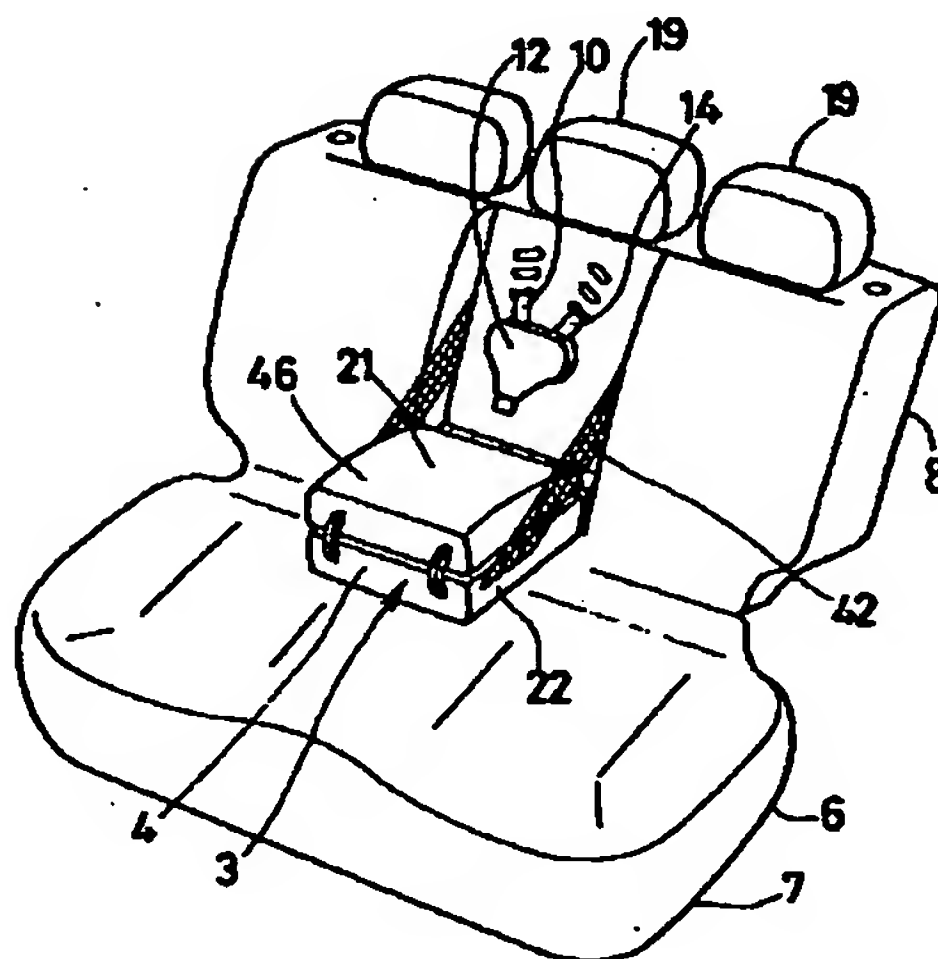
【図7】



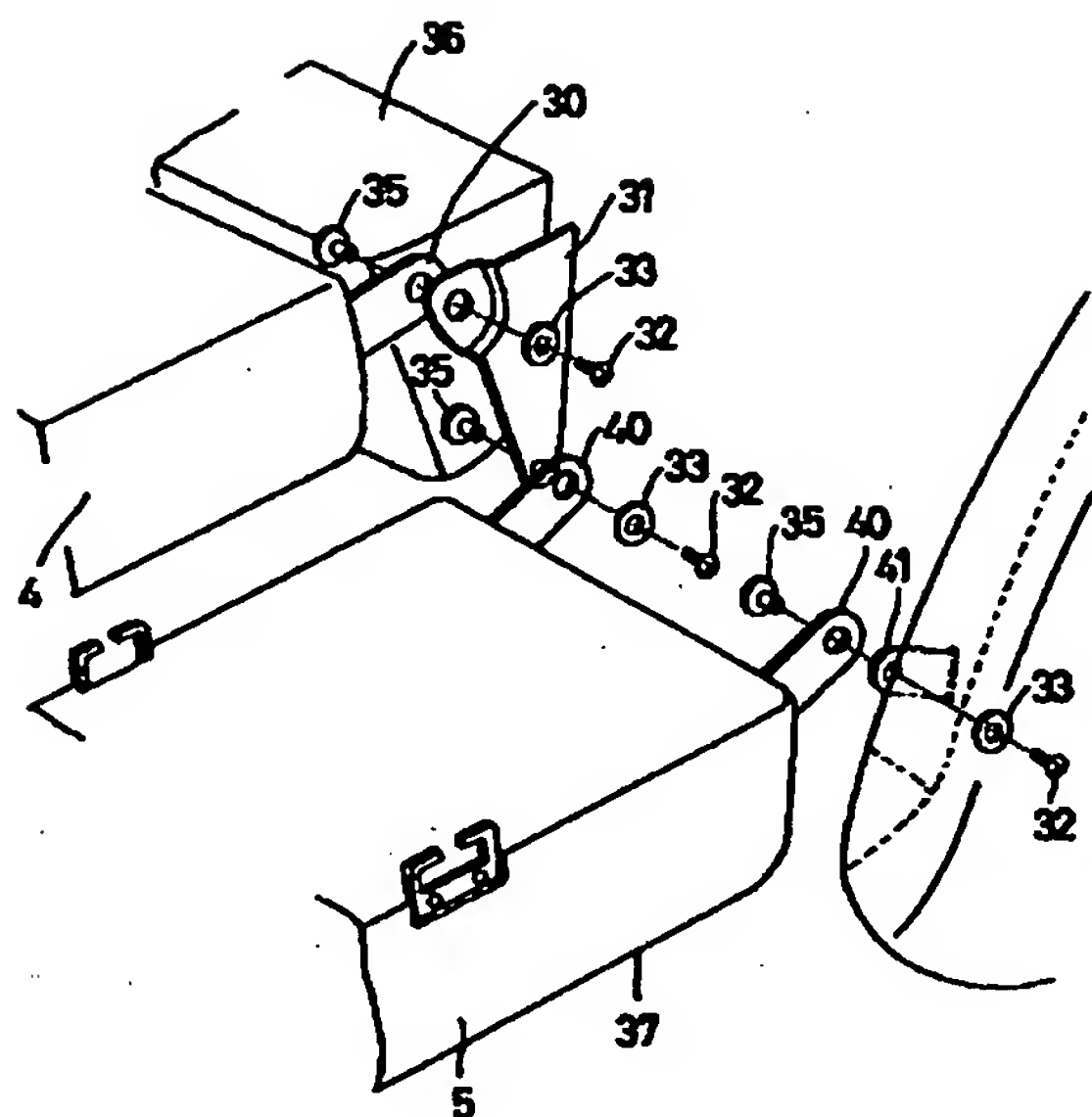
【図8】



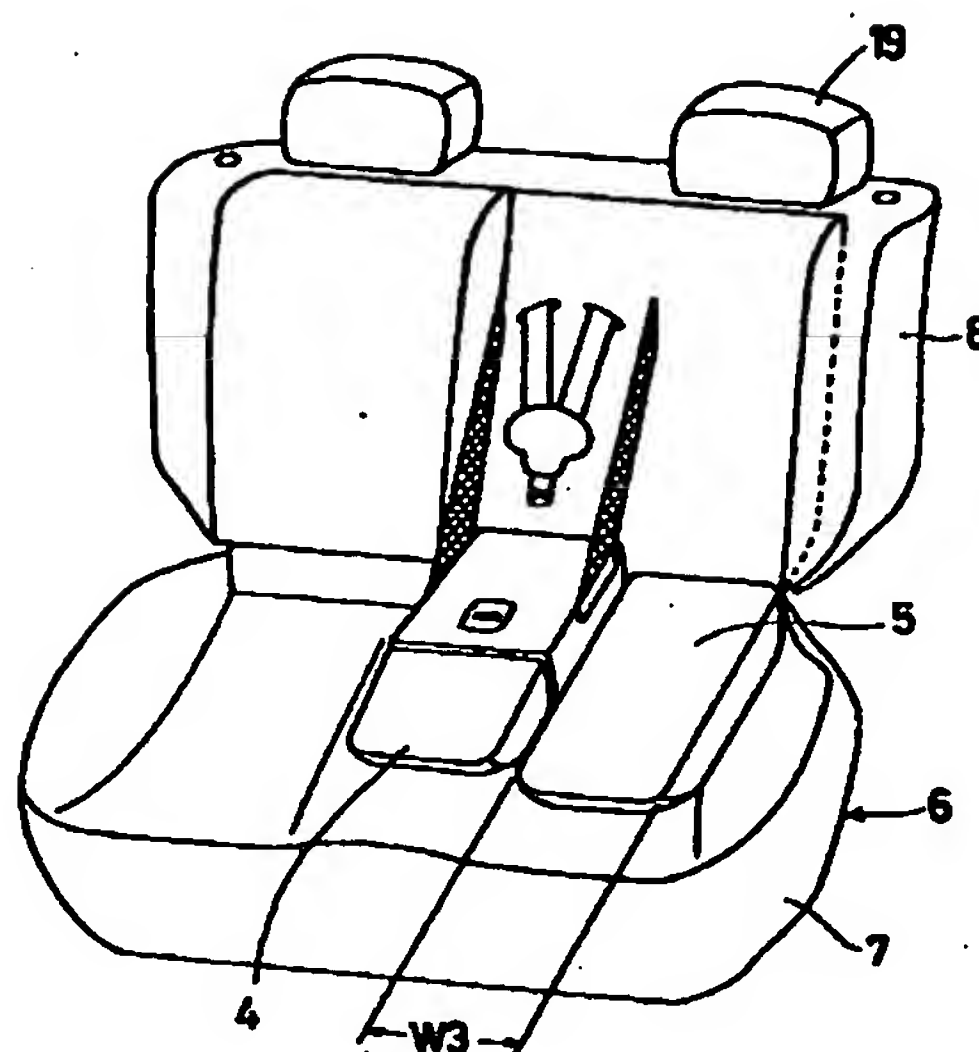
【図11】



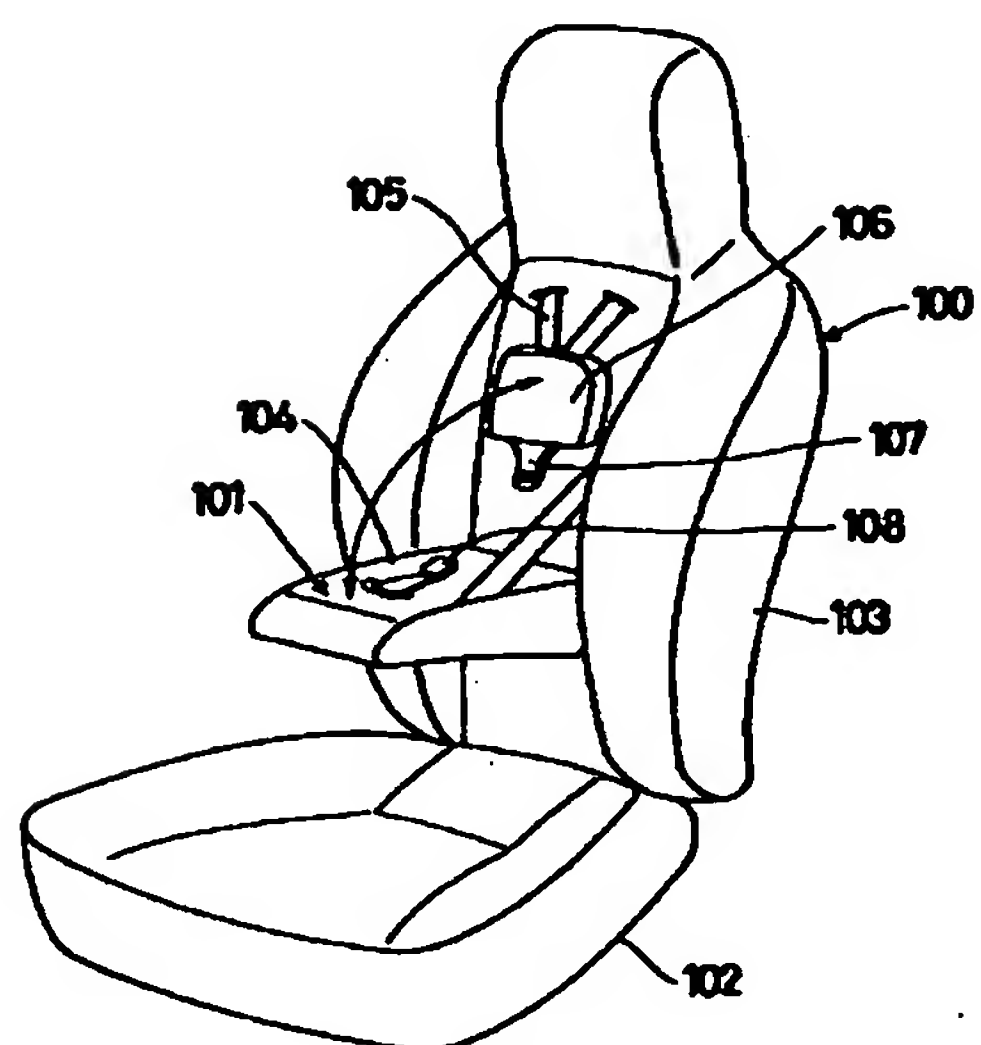
【図9】



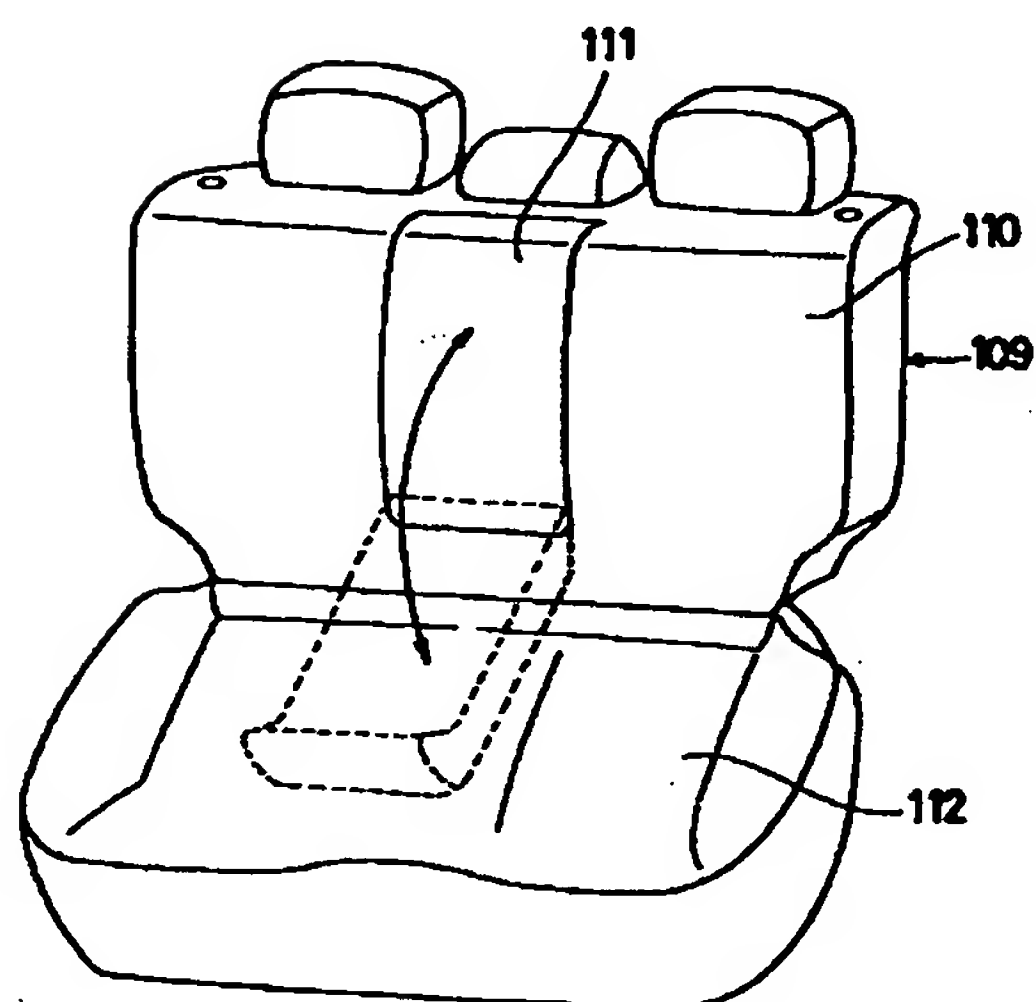
【図12】



【図13】



【図14】



フロントページの続き

(72)発明者 高根 均
静岡県浜松市西伊場町6-407